

次第1. 開会

甲賀市市民憲章唱和

次第2. 議事

(1) 第2次甲賀市観光振興計画 第2期基本計画(案)〔答申案〕について

事務局： 第2次甲賀市観光振興計画 第2期基本計画(案)〔答申案〕について説明。

(資料6、資料7)

委員長： 資料6【基本指標】第2次観光振興計画12年間(H29～R10)の目標値の数字ですが、令和10年において目標当初が381万人から421万人に変更となっています。先ほど説明があり伸び率1.05で、当初よりも増やすことは強気なことだと思います。皆さんはこの説明で納得いただけましたでしょうか。

観光入込客数は、令和元年に上がってきており、そこから後はコロナ禍で落ちていますが、もっと潜在能力があるのではないかと考えておられると思います。

ここの進捗評価指標に書かれている数値の伸び率を見ていると、本当にそれだけ伸びていくのかということですが、これは令和6年までの目標で、「甲賀流リアル忍者館」や「道の駅あいの土山」などが、令和10年にはそれに相応する数で伸びてくるという考え方で良いですね。

事務局： はい、そうです。

大河原委員： 33ページに「シビックプライド」という用語が出てきています。他ではカタカナ語に注釈が入っていますので「シビックプライド」についても入れておかないと分かりにくいと感じました。

委員長： 一般的な言葉にも注釈が入っているので、「シビックプライド」も入れられますか。

事務局： 説明を加えたいと思います。

委員長： 「シビックプライド」という言葉は、この2、3年特によく使われるようになってきました。「市民意識」という意味もありますが、それぞれのまちの市民がそのまちを好きになり、そのまちが他よりも良いところがたくさんあるということ、自信を持って肯定的に捉えるという意味合いが強いと思います。

例えば甲賀市に観光客の方がいらっしゃったときに、市民が「なぜこんな何もないところに来たのですか」と言ってしまうと、これは「シビックプライド」が醸成されてないのです。観光客としては、「こういう良いところがあるのですよ」と言われた方が来た意味があるというあたりも含めて、広義ではあるのですが、一般的な言葉説明を加えてください。

事務局： 一般的には「都市に対する市民の誇り」という概念で使われることが多いので、そのような形で注釈を追加します。

委員長： 「シビックプライド」は総合計画にも言葉が出てくるのでしょうか？それも含めて整合性を図っていただきたいと思います。

事務局： 対応させていただきます。

清水委員： 委員長からも疑問点の発言がありましたが、市役所の目標値だから高く掲げた方が良いと思うのですが、現状の甲賀市あるいは将来予測される甲賀市を客観的に眺めてみると、「道の駅あいの土山」はこのような状態で伸びるのかという疑問があります。

また、観光客といっても、外部からの観光客もあれば市内の方々が市内で観光されることも予測すると、甲賀市の人口も減少傾向ですね。この数字で良いのでしょうか？

事務局： 高い目標かもしれないと悩んだところではありますが、コロナ禍で観光入込客数に関しては数値が読めない状況で、今の考えとしてはコロナ前の姿を目指すということで、「甲賀流リアル忍者館」や「道の駅あいの土山」の増加数を物差しとして測っていく以外でもさまざまな施策を実施し、今までのような年間の伸び率を見せていきたいという思いです。難しい数字ではあるかもしれませんが、市としてはそこを目指していきたいという思いで設定しました。

委員長： 観光庁等もこのコロナの時代で、今の訪日外国人総数の目標値は、かなり下回っているのですが、当初の目標値を取り下げたはけません。おそらくコロナ後は以前と同じくらいの伸び率ということは、日本に来る人が増えるというより、世界的な観光動向として、人が移動するということ自体が回復するだろうということも含めてのものなのです。ただ議論すべきところはあり、ずっと上がっていくけれども、許容するサイズがあるので永遠に上がるはずはないのです。何万人がこの都市に対しての適正值か今後考えていくべきです。

京都でオーバーツーリズム問題が出て、来れば来るほど良いという発想だったのが、何万人ぐらいまでがこのまちのキャパシティだから、それに合わせてこうしていくべきだという考え方は少しずつ増えていますが、今はその部分が見えていません。本来ならば、ホテルが何か所あるから、観光地がどうだということがあるのですが、コロナがなかったとしたら、この数値は突拍子もない数字とは言えないと思います。どう回復するか、意外と早いかもしれませんし、議論として新しい観光になると言う人もいるのですが、その一方で元通り戻るのではないかという人もいるという、この辺りがまだこれからのところがあると思います。

考え方としてはこの数字を挙げた以上は、この数値に向けた整備計画を考えて

いかなければならないということは当然だと思います。

小林委員、専門家としてこれは厳しい数字ですか。

小林委員： 数字としては木川委員長がおっしゃっていた通り、我々も2年後ぐらいには大体原状復帰か、そのあとはまた需要が増えてくるというのが基本的な考え方だとは思っています。この数字に対して皆さん違和感があるというのは、その根拠、これをするのでこれだけ上がりますということが、明確に出ていないことが一つ挙げられると思っております。例えばユニバーサル・スタジオ・ジャパンではないですけど、何かを作りますとなれば何年後かには上がりますということが目視する数字として出てくると思うのですけども、それが見えてくれば、全くおかしい数字ではないと思います。

委員長： 例えば別の考え方を入れてみると、「甲賀流リアル忍者館」などの施設ができると右肩上がりというよりは、初めが数値は多くだんだん下がっていくことが一般的で、今回の場合はコロナと重なっているのでこのような状態になっていると思うのですが、令和6年のところからは緩やかに落ちていくという前提で、その代わりに新しく整備をすることが将来的にあるという考え方で良いですか。

事務局： 「甲賀流リアル忍者館」については、令和7年度で10万人という目標を掲げております。「甲賀流リアル忍者館」は忍の里・プララのホワイエの部分を改装しスタートを切っております。今後、年次計画的に忍びの里・プララの敷地の部分や隣の古民家も活用した中で整備計画を進めていくこととしております。

また、竜法師区の中でも「甲賀流リアル忍者館」の開館を契機に、地域の有志の方で合同会社も立ち上げられ、さまざまなビジネスに発展をさせていきたいという思いも強く持っていておりますので、今後地域との繋がりの中で面でも広がってくるというところも込めて、これから伸びていくという考え方に立っております。

これはまだ計画段階ですが、「道の駅あいの土山」は令和6年あるいは7年あたりに改築を計画しております。今の施設が道の駅として建てられていない建物で、築40年が経過してきたということもあり、近年の道の駅から見ると施設の的に手狭であったり老朽化が進んできたりしております。施設の改修とあわせて、会社も第三セクターで運営ということもございますけども、会社の経営や体制も立て直しながらリニューアルをさせていただきたいというところでの人数の増加という部分もございます。

それと加えて、今まであまり観光の中では言ってこなかったサイクルツーリズムやグリーンツーリズム、ウェルネスツーリズムなど、こういった多種多様なツーリズムも計画の中でしっかり落として取り組んでいきたいということもございます。

前々回に清水委員からも、今の職員のキャパシティや能力の中でこれだけのこ

とが本当にできるのかというご指摘もいただいたところですが、そういった思いや希望を持って進めていくということですので、個別の具体的な数字の積み上げではないですが、このような数字で目標値を設定させていただいているということでございます。

委員長： 一つ質問なのですが、観光協会の会員数というのは今ちょっとずつ下がっていますが、これは令和元年のところから見ると、これはコロナの影響だけではないと思うのですが、これを伸びに変えていく何かやり方があるのでしょうか。

事務局： 観光ビジネスの活性化という位置付けで観光産業を主として稼いでおられる企業体が少なく、そういうものを測る物差しとして観光協会会員数事業者で徹底をさせていただきました。増える見込みについては、「甲賀流リアル忍者館」の今後の整備の中で、屋台市場のような店舗を出す計画があるのですが、観光協会の会員になっていただかないと出店できないということで、令和2年度に入りまして、観光協会の会員が徐々に増えてきている状況です。そのような取っ掛かりを作った中で、市も政策として支援をしながら増加を目指していきたいという思いをしております。

考え方としては、今後さまざまな観光施策を打っていく中で、両観光協会が核となって、進めていっていただくということですが、そうした中で、先程来申し上げますような多種多様な観光のツーリズムを、そういったところにパイが広がっていくというようなイメージを持たせていただいておりますので、市内の企業の方あるいは個人の方々であっても、現在は、観光に何も関わっておられないけれども、そういう施策が広がることで新たに観光に関わっていただけるようなことも増えてくるのではないかとということを含めて、会員数が増えていくという見方をさせていただいております。

小山副委員長： 甲賀市観光まちづくり協会は一般社団法人化したしまして、もともと甲賀市観光協会は個人の会員が非常に多い団体で事業所が非常に少なかったわけですが方向転換をいたしまして、個人の会員は当然年会費も安いわけですが、歴史文化に誇りを持ったたくさんの市民の方もおられますので、その方々をしっかりとフォローもしながら事業所を増やそうということで、「甲賀流リアル忍者館」ができて以来、年会費が1万円なのですが事業所会員も増えてきております。

お土産物を卸していただくのに、会員になってくださいという形の中で、我々が目指せるところはオール甲賀での観光振興の中で観光まちづくりをしていこうという中で、協会に入っていないと儲けられないとならないと協会に入っているメリットもないと思いますし、今まででしたら、何とか入っていてくれないかという協会でしたが、これからは協会に入っていないとなかなか情報も入ってこないと思うくらいしっかりと体制を整えながらやっていきたいと思っておりますので、この数字はこれ以上に会員数をふやさなければならないということやっていくつもり

です。

委員長： 不思議ではない数字ということですね。

小山副委員長： はい、大丈夫だと思います。

委員長： 藤原副委員長、信楽観光協会はどうでしょう。

藤原副委員長： 信楽観光協会は今のお話と逆で、事業所の解散がほとんどなのですけれども、今のところやめないでねというところも多いです。さまざまな事業をしていく中で、あなたの事業所が必要なので入ってくださいという方法で広げていく方法はまだあると思っています。

委員長： 努力すれば数字を現状維持もしくは向上させることはありえると考えたら良いですね。

藤原副委員長： はい、そうですね。

委員長： おかしな数字でもないということは両観光協会からおっしゃっていただきました。観光業という言葉自体がどんどん広がっているので、さまざまなことをそれに絡めていただいたら良いと思います。

委員長： 資料6が1枚になっているので目立つところですが、前段のときからも議論になっていたゴルフ場の利用者を含めたものや、コロナの影響かもしれませんがキャンプ場の人が多くなっていますので、追い風の部分は活用いただいたら、421万人は難しい数字ではないというふうに思います。勝手な感想ですが、日本のこれからの状況にもよりますけれど、外国人観光客を日本の国策として地方誘客するというのが一丁目一番地なのです。甲賀市もゴールデンルートに近いところは通っていますので、取り込みの仕方もあるのではないかと思います。

今ここでは前段の甲賀市観光振興計画なのですが、また次のタイミングでしっかりとどのようにしていくか見直して、コロナのことがどうなるか分からないところありますが、思ったよりも早く収束しオーバーツーリズム問題が押し寄せたら、そのときにどうするか改めて政策をしっかりとしていけないと思います。

山本委員： 甲賀市観光まちづくり協会さんの会員数がどうして増えるのかなと疑問でしたが、ご説明をお聞きしてよく理解できました。

コロナ禍でなかなか出しづらい数字だとは思いますが、我々のところも3年後には回復するだろうということで、数値は組み立てておりますので、概ね同じような数値の出し方なのかなと聞いておりました。

委員長： 3月に名古屋から和歌山に帰るときに土山サービスエリアに寄ったのですが、夜でも車が多いですね。

山本委員： いや、3月ですと春休みに入る頃もほぼ半減です。前年度は令和元年度比でい

くと来場者数 50%です。

委員長： 私が行った時期がそうだのかもしれませんが、あの辺りのサービスエリアは夜になると満杯で車を止めるところがないという印象を受けました。

山本委員： トラックの方に夜かなりご利用いただいております。我々のところも含め今どこのサービスエリア・パーキングエリアもそうだと思うのですが、通行量そのものは8割ぐらいを維持されておりますので、通行量からするとかなり痛手があります。

委員長： 今後回復してきたときに新しいやり方や繋ぎ方など考えておられるところはあるのでしょうか。このキャパシティを超えて増えるという見通しは将来あるのですか。

山本委員： 新名神高速道路は6車線化の工事にも入られていますし、新名神全線開通もありますので、その部分については我々も NEXCO 中日本さんと相談しながら何かしらの仕組みづくりと、あと一般道からお越しになるお客様を観光の皆さんと協力させていただきながらご利用いただける仕組みづくりは少しずつやっていきたいと思っております。

委員長： 一般道用の駐車場があつてサービスエリアに入れるということですか。1時間止まったら近くを散策できるなど逆もあつたら面白いと思います。

山本委員： そうですね。NEXCO 中日本さんにそのお話もさせていただいたのですが、駐車場のキャパシティが小さいので、高速道路の利用者の方を一般道を使って観光地に誘導するようなことが今は難しいところではあります。

委員長： もし駐車場がこれだけあれば、将来こういうことできるという新しい形の観光になると思います。

中西委員： 信楽高原鐵道の状況ですと、前期は一昨年と比べ、ご利用が約7割の状態になっています。定期券のお客様については、年度初期4月5月は学校が休業でしたので非常に落ち込んだのですが、それからあとはほぼ元の状態に戻ってきております。一般のお客様のご利用というのは、去年の10月11月は平年の8割ぐらいまでは一旦戻りました。しかしその前後はコロナの影響で、特に12月から後は非常に厳しい状況になりましたので、観光としてお見えになられているお客様につきましては半分から6割ぐらい減っているような状況です。それがまだ今期に入りましても続いている状況です。

いつもでしたら信楽地域の中で4月5月にはイベント等もやっていただいているのもありまして、年間でも比較的多くのご利用がある時期なのですが、そこが完全になくなっていきますので、なおかつ6月に入りまして例年より一層人の動きが落ちるのですが、今年度も落ちておりまして、お客様が1人も降りてこないという車両も中にはあつたような記憶がございます。

お客様自体が全然来られてないのかということとそうでもないのですけれども、公共交通というよりも、マイカーなどで移動されている傾向が今非常に強いと考えます。それと、観光という部分で今バスを使って団体で動かれるというのが全然ございませんので、そういった部分も大きな痛手にまだなっていますし、現在も続いています。このようなことが契機になって、今まで通りの観光の仕方といたしますか、お客様がどのような形で来られるか、これからの動向を見ていかないと全然読めないのではないかと心配をしています。元通り皆さん一緒に大勢で来てくださるとというのが一番有り難いのですけれども、なかなかすぐには戻っていかないと思います。あと2年すればというお話もありますけれども、その生活様式自体が見直されてしまったら、観光自体も別に行かなくてもいいのではというのが一番怖いのですけれど、そうではなくて行き方自体も変わってくるということを非常に心配しながら、この計画も見せていただいているところでございます。

委員長： そのあたりも、この先の議論という形で皆さんとお話してみたいと思うのですけれども、本当にどうなるのでしょうか。

人口でいうと、2050年には和歌山は人口が半分を下回る自治体ばかりで大変な状態になりますので、滋賀県は87%と減ってはいますけれど非常に恵まれていると思います。ただ、高齢化率はすごく高まっています。

おそらく私よりも下の世代というのは団体旅行がそこまで好ではないFIT（個人海外旅行者）層になっていて個人旅行が多くなる。その一方で、今の団体旅行が好きな方々が観光に行きにくくなるという時に、その行きにくくなることをどれだけ抑えてあげるか、電車であれば車椅子で大丈夫か介護的なものも含め観光には行けるようにするにはどうするかなど、その辺りが現実的な議論になってくると思います。この高齢化社会を迎えている時の観光業の大変な部分というのはいろいろあるような気がします。そのあたりも含めて、今後のことも議論していきたいと思います。

信楽高原鐵道で一つ気になっているところは、地域の人たちはこれがなくなったら困るという危機意識は持っておられるのでしょうか。

中西委員： 個人的な感想になりますが、以前よりはそういう意識が薄れてきていると感じるところがあります。特に平成25年に上下分離という方式を取り入れた以降、市に第三種鉄道事業者として鉄道施設の維持管理していただいているわけですが、市が入ってくれているという部分で、より潰れにくい、何とかなるのではないかという考え方が住民の皆さんの中にはあるのではないかと、もう一つは、少子高齢化、特に少子関係でご利用になられる子どもさんが減ってきて関わりになられる住民も減ってきているということです。直接自分の身に降りかかってくる鉄道利用の部分が減ってきている影響が大きいのではないかと思います。

委員長： シビックプライドに近いですが、この鉄道に対しての愛着を住民の間でどうやって深めていくかも観光では重要になってくると思います。

芳田委員： 数値目標に関しては、会議を経て補正もしつつ挙げられているので問題ないと思うのですが、一つ一つを見ると一定の落ち着きがあった上での数値かと思えます。

ただ各ファクションのリーダーの先輩たちが、この目標値以上はいけるといふ言葉がすべてのポイントで出たら、達成できると話を聞いて思いました。

湖南市の十二坊温泉ゆららの方と最近話す機会があり、入浴に関しては湖南市に行くのですけれども、流行っているのがキャンプ場で、今の状態でも空きがないような環境なので、この数値目標に当てはまるものだと思うのですが、地元の人を見たときに、今の状況で県外から大阪や京都、名古屋からという車が止まっているのはあまり良いように思わない方が既存の利用者の方でおられると聞いていると、人数目標だけで全て立ててしまうと、他の弊害も生まれてくるのではと思っています。ですので、本当に200万人であろうがこの地域にお金を落とすことが指標として、この令和3年以降の中で、今までなら2~3万円しか使っていないけれども、こちらへ来たら10万円程使ってしまったと言われるような地域にすることも一つの指標としてあると感じました。

委員長： 初めに出てきた観光客と住民との軋轢はすごく大事な点で、コロナ前であれば過渡期だから仕方ないと無視していたわけです。コロナ禍で、今後外国人の方々例えば中国系の観光客・旅行客が来るということに対して、京都などは凄く抵抗感がある方がたくさんいる、かなりの誤解とかなりの偏見の部分があるので、やはり本来としては教育の問題だと思うところもあるわけです。しかし、それを無視できるかというところできない、やはり私たちはこの観光の中で人だけではなく、私たちが来て欲しい人に来てもらうということだと思うのです。前回の会議でもそうですが、信楽は別として甲賀市が観光地だという意識が無いということが元々あったのですけれども、今は日本各地が観光地なので、その中でどうやって皆さんが分かり合ってやっていくかということはとても大事なところだと思います。

病気が流行ると人は心が狭くなることもあるので、コロナ以前の人の方が来ると、その軋轢の部分はあるのではないかと思います。この状況が続くのであれば、今後もキャンプ場はにぎわい続けるのですが、需要喚起されてこれからも伸びていくのであれば今投資対象かもしれません。

場合によっては、林業がこれからもっと伸びてくるという人もいないですし、その辺りと関係しながら、実際のお金を動かす産業があり、それを理解する観光業のような感じなのかもしれません。

事務局： 甲賀市内にもキャンプは数ヶ所ありますが大盛況だと聞いています。土山町大河原にある「かもしかオートキャンプ場」も予約がたくさん入っているということですし、まだ計画段階だとは思いますが、それでも拡張も考えておられるという話も聞いています。信楽町のグランピング施設もホームページを見ると予約がたくさん入っていますので、コロナ禍の時代にあって、アウトドアや外での観光というのが今は主流であると思います。どうしても流行り廃りもあると思いますので、キャンプについてもいつかは平準化していくときも来るとは思いますけれども、グランピングという高級なキャンプが丁度流行りかけた頃にコロナ禍になりましたので、その伸びが今後どうなっていくのかというところが、まだまだ見えていない部分もあると思っています。アウトドアを観光につなげていくということもあり、マイクロツーリズムもこの計画の中に掲げさせていただいておりますので、県内や近隣府県、あるいは市民の方が市内で観光をしていただくところにも、力を入れていくことで回っていければと思っています。

大河原委員： 受け入れの体制整備について、来られたらICTを活用して多言語化で説明ができるということもこの計画に書いているのですが、来られるまでのPRなどをしないことには来てもらえないと思います。さまざまな情報誌はすでに英語には翻訳されているものがあり、観光協会にもそのデータがあると思うので、例えば来られるまでのPRとして英語で周知するという活動も今やっつけていかなければならないと思います。

それから、熱海の温泉地で土石流などの甚大な災害がありました。実際に来られた観光客の方が安心して甲賀市で観光してもらうために、市内に住んでおられる外国人の方に対する多言語の情報発信などは市と提携して国際交流協会が行っているのですけれども、観光客となると逃げる方向が違いますので、まず市内から出してあげる、安全なところに行かせてあげる方向も必要と思います。災害時にどう対応するか、前の計画の中では、国際交流協会と連携して災害時の外国人の対応をしますということが計画にあったと思います。今回はその部分が全部なくなっているのかその文言が見つからなかったのですが、この計画に載せなくとも関係者間で共有や訓練をしていかなければいけないと思います。

委員長： うちの大学などでも外国人の先生方が一番研究費を取れるところがそこなのです。和歌山は災害県なので、津波が来たときに外国人の方にはどう対応するかそのアプリケーションの開発をする。外国人の方々が日本に来たときに成田空港・関西国際空港で共通のアプリケーションを入れることが多いので、そのときに対応できるものにしていくにはどうするかだと思います。ここで対応策を考えておく必要があるのですが、今の考え方はICT技術で、外国人の方々にしっかりこちら側から情報を出せるということだと思います。そういう意味で考えると、こ

これは甲賀市だけで考えるものでもなく、県などの観光でもそこまで組み込まれているかというところです。

県によって観光のPRの予算はかなり違うと思っていて、さまざまな団体と観光映像のプロモーションに監修として参加すると、高知県だと2年間で約9600万円を観光プロモーションにかけています。新潟県でも約2400万円です。なぜそれだけお金をかけるかというところと空港があるからです。県内にある空港が国際空港なので、それに対する予算を入れてやるということなのですが、それは実はおかしな話で、空港がない滋賀県はPRしなくて良いのかというと、京都が隣にあり、ゴールデンルートを通っているのです、PRの仕方はいろいろあるのではないかと思います。

事務局： 大河原委員からのご質問につきまして、来られるまでのPRでは25ページ、それと合わせて緊急時の対応について、③「ICTの新たな技術による地元情報の発信」で整理をしております。前回の文言の中では「観光アプリケーションの構築による地域情報の発信や安心して観光できる体制構築のため、災害や緊急時の情報発信について、観光部局と連携して推進するとともに、外国人観光客を対象に多言語化も含め検討します」という表現がなされておりました。これが今回「SNSを活用した観光情報の発信や新たなICT技術を取り入れたマーケティング調査に取り組みます。また、観光アプリケーションの活用等も検討し、新しい生活様式に対応した、安心して観光できる周遊観光の構築や多言語化の対応に取り組みます。」という形で整理をさせていただいています。

「安心して観光できる」というこの安心という部分で包括をさせていただいていますが、前期の内容で災害緊急時の情報発信についての文言が入っていませんので、その要素を加えたいと考えております。

委員長： 前はアプリケーションの開発まで踏み込んだ形としていましたが、甲賀市から見ると上に県があるので、県に対して、外国人がちゃんと対応できるアプリケーションや安全対策はしっかりしてくださいと要望し、県クラスでやっていかなければいけない話だと思います。わざわざ甲賀市に来て甲賀市だけのアプリケーションを入れるということはないと思いますから、自治体として安全対策が必要だと連携をとっていただくことが一番大事だと思います。確かに「安心して」という言葉に納得できる部分はあるのですが、「新しい生活様式に対応した」にかかるので、そこは10文字程度増やしてもいいと思いますので、ご検討いただくことができますか。

事務局： はい、分かりました。

委員長： 大河原委員、その形でよろしいでしょうか。

大河原委員： ここで大体ざっくりと含まれているということですね。

清水委員： 誤解していた部分があったのですが、これは計画ですから項目ごとに徐々に具体的な計画などをされることで、それは了解しました。

その事を進めるにあたって市の財政もそこまでたくさんあるわけではないでしょうし、「道の駅あいの土山」を改修されるということは良いと思いますが、私も全国の道の駅を利用していますが、あの立地での道の駅は首をかしげざるを得ないので、私的な要望なのですが、国道 307 号線あるいは幹線道路が交わる地域の国道 1 号線沿いにかかなりの規模の道の駅を設置して、道の駅の中身も従来の車が止まってお土産を買うあるいはトイレを利用するだけの道の駅ではなく、もう少し進んで甲賀の地場産業であるような産品を積極的に販売するなど、先ほどキャンプ場の問題もありましたけどもオートキャンプ場を併設するような変わった形で、大規模なものをされるということを希望としてはあるのですが、おそらく財政的な問題などでそんな簡単にできることではないと思います。

甲賀市は文化面の取り上げが非常に少ないと思うのです。価値のある寺院が甲賀市には数多くあります。3 大仏という形で大池寺と櫟野寺と十楽寺を取り上げてられており、素晴らしいことだと思うのですが、それすらあまり外へ PR されていない、知らない人がほとんどです。外部に対して知らせることも大事でしょうけど、もっと市民にも知らせるべきだと思います。

今たまたま高校生と関わることがあるので、時々高校生と話をします。つい二、三日も、この時期どこも行くところがないというので、大池寺にでも撮影に行こうと話をする、高校生は大池寺を知らずどこですかと聞くのです。水口の住人で大池寺を知らないのです。この頃の学生は自分の家から学校までの往復しかしない。我々の子どもの頃のように町中を探検することはないのです。これからは若い人にも甲賀市のいいところを一生懸命 PR して教えて込んで、教育委員会とうまく連携をとり、この事業を進められることをおすすめしたいと思います。

それから、当然のことながらかなり高齢化しています。私の住む地域も 50% を越えて、もう年寄りしかいない。そんな中で、元気なお年寄りもいますが、大体へたってきているというそんな状態で、今度は少子化です。その状態で果たしてこういう目標数値が達成できる事業がどんどんできるのかというのは疑問を持っています。

従って、先ほども何回も繰り返しますがあまりお金がかからないで、地域の住民を巻き込む文化的な事業を通じての観光施策を進められたらという気がします。

委員長： そのあたりも含めて、全体の話も議論を最後の時間にしてきたいと思うのですが、事務局からお願いします。

事務局： 前回の審議会の後に庁内の全職員への意見照会や議会への見直しに係る進捗状況の説明をし、いただいた意見に基づき、資料7を青字で修正してお示しさせていただいています。まず、資料の36ページをご覧ください。庁内の全職員の意見照会や議会への見直しの進捗状況の中で意見が出ましたが、DMOの箇所のことでありました。

もう少し踏み込んだ表現はできないか、DMOは重要なことであるため慎重に議論を進めるべきである、また、DMOの素案をお示しさせていただいたときには、印象的に後退したのではないかという内容のご意見もいただきました。

これまでからも説明させていただいておりますが、平成29年のこの第二次甲賀市観光振興計画の策定時には、平成30年度にこのDMO組織を設立するとしておりましたが、平成30年3月に専門家からの時期尚早であるのご意見を踏まえまして、DMO組織体の国の認定を取得する前に本市の観光産業を底上げするため、甲賀市の観光の大きな役割を担っていただいております両観光協会の機能強化を行う支援をさせていただくということで、この数年は進めて参りました。これに基づきまして、甲賀市観光まちづくり協会は、令和元年に一般社団法人化され、旅行業の取り扱い資格の取得もいただきまして、また、信楽観光協会は、モバイルアンケートなどを実施しまして、マーケティング調査に基づいた取り組みを進めていただいて、DMCの設立の調査をしていただいているところで

す。

市としては、この第二次計画の策定時点から、国のDMOの認定や更新手続きが厳格化されていること。また、作った場合、誰がプレイヤーになるのかなど多くの課題が存在していることから、今後、甲賀市の観光マネジメントにおいてこういった組織が本市に望ましくふさわしいのか、組織の設立のみを進めることを目的とするのではなくて、再度現時点で、観光DMO等についての勉強会や先進地視察など、これまで不十分であった共通認識を深める取り組みを実施しまして、設立された他市の成功事例や課題などを調査・研究・検討といった取り組みを進める内容に変更させていただいております。これまでの審議会でも、このDMOの審議をいただいておりますが、この方向で進めていくことについて再度委員の皆様にご意見をいただけたらと思っております。

もう一点は、前回木川委員長や大河原委員よりこのメンバーでDMOに係る議論をしていただけたらというご意見をいただきましたので、甲賀市観光振興計画の審議会におきましては、こちらの計画の策定とその進捗状況の管理を行っていただくこととなっており、第二次甲賀市観光振興計画第二期基本計画が策定されましたら、委員の皆様には必要に応じて、この計画の進捗状況をご報告させていただいてご意見をいただくことになるのですけれども、この本市におけるDMOのあり方についても継続的にご審議いただきたいと考えております。それに合わ

せて、今後両観光協会の皆様とDMO等の勉強会や先進地視察などを行う予定をさせていただいておりますので、木川委員長をはじめとしまして委員の皆様にもぜひ関わっていただけたらと考えております。

委員長： 今の話はその通りで、前回にもDMOを作るという流れで終わり、それが時期尚早だという形でやらなくなったが、時代は変わりDMOはどのようなものなのか、当時はそれを作るというのが、全国で90しか認めないという流れがあったので早めに出さないと間に合わない状態だったのですが、結局130程度となり多過ぎるという考え方や、また早急に作られた団体にとって良くないということがあり、認定を取り消されるという事例が出てきています。その間にDMOの考え方も変わってきていて、成功事例と言われるものが少しずつ出てきているという状態です。前回、平成30年のDMOを作りましょうという時期とはまた違う状況の中で、大河原委員がおっしゃった通り、言ってみればこの審議会がDMOみたいなものなのです。ここに各団体の方々がいらっしゃって、これなら一緒に組めるという話で、今までなかった連携ができるということが一つの大きな意味合いもありますし、もう一つDMCという言葉も出てきましたけど、結局DMOという団体をつくるかどうかは、それほど大きな問題ではなく、ただDMOが担うべき機能というのは本当に必要なもので、やはりどことどこがちゃんと連携できるか、例えば農業や林業で何か体験することも観光となったときに、昔の観光業とは違う広い意味での観光という形がある中で、清水委員がおっしゃったように、日本中の観光協会の弱さの一つが、文化観光が少ないというのは言われているところで、例えば市だったら宗教団体とのつき合いは難しい部分があるのですが、お寺と何か一緒にやりましょうと文化として考えていくときには、民間だったら組めるという部分も当然ありますから、今の段階ではまだ明確なものではないですけれども、今の枠組みでDMOの議論に続けていくことができないかということだろうと思います。

実際にこの10年20年後に甲賀市という場所が全国に見ても、あそこは凄く面白いと思われるようにするために何が足りないのか、ここが組めば何かできる、でもこの部分が実は足りていないからこれができていないという辺りを皆さんで議論をしていくというのが、次のフェーズと思っています。その議論のなかで枠組みができればという話なのです。そのあたりは、どうでしょうか。

小山副委員長： 幅の広い話でなかなか難しいのですけれども、DMOもそうですし、先ほど大河原委員もおっしゃっておられましたインバウンドも含めて、私も甲賀市観光まちづくり協会をお預かりして数年経ちますけれど、特にインバウンドは難しいと思っています。やはり観光まちづくりと協会も名前を変えさせていただいたのですが、甲賀市はものづくりのまちで、一番大切なのは観光というものに対してのとらえ方ですよね。市民全体が伝統文化に誇りを持っておられる方がたくさん

おられるところで、協会に 3000 円の会費を払われて、「観光頑張れ」という形でご支援いただいている方がたくさんおられる地域で、清水委員がおっしゃったように、たくさん良いところがあり、素晴らしいところがあるということで誇りに持っておられて、本当に市民意識が高い地域だと思います。

ただ私も含め、それが観光産業や観光ビジネスに切り換えがきかない人達が多いというものも、儲けることを良しとしていないというのはひしひしと感じます。来ていただいて見ていただいて、地域自慢や良いものがあるということは良いのですが、金儲けをしようとなるとちょっと引かれるのです。1本のジュースでも買ってもらおう、一つのまんじゅうでも買ってもらったら良いじゃないかという方は非常に少ない。やはり事業者さんも少ないですし、お店も少ないですし、そういうことなのでたとえ 10 円でも 20 円でも売り上げを上げようという形でみんなが取り囲まれるように観光まちづくりっていう形の中で、誇りを持った中で観光客を受け入れることで、地域も魅力あるまちになるということでずっと訴えはしているのですが、どうしてもガツガツ行かない、ガツガツ行かない地域だからこそ私はすごく良い地域だということも反面思っているのもあるのですが、その辺りが観光産業に移っていくという難しい地域なので、本当に皆さん儲けたらという地域ではないので、今後も来ていただいた方にはまたリピートしていただける地域であると思っておりますが、しっかりと準備を整えて、流行り廃りのあるものではなくて、しっかりと地に足をつけて、地域として観光というものをしっかり考えて、忍者・東海道・信楽焼という 3 要素は今後もぶれずに、その中でもスポーツやアートなど、様々な要素を踏まえながら、大きな流れに沿っていくことは大切だと思います。私は甲賀市の特徴は人々の良さだと思っております、それを殺さないように観光振興を進めていくという中で、DMO というものを私もいろいろ調べて考えましたけれども非常に難しい。連携、連携というのは当然今も一般社団法人観光まちづくり協会の様々な会員の方と連携をとらせていただいておりますし、信楽観光協会もそうですし、公共交通機関やサービスエリアなど様々な方に理事に入らせていただいているという中で、連携も深めていっておりますので、組織を作るとその組織を回すためにさまざまなお金が必要だったり労力がかかったりしますので、考え方は利用させていただきながらも、コツコツとみんなの意識を上げていくことで、起業される方を増やすなどに注視していった方が、組織を作ったら観光客が来るということはないと考えますので、おもてなしの心で、来ていただいた方がまた来ていただけるような観光まちづくりをみなさんでできるような考え方をしていく方が近道ではないかと考えております。

委員長： 確かにその通りですね。だからこそ応援したいという気持ちになり、甲賀へ行って良かったと思った方がふるさと納税をする、これも一つの観光といえますかそのまちに対しての応援となり、気持ちのいい形で盛り上がって行くのは良いと

思います。

機能としてのDMOが、今までできなかった何かをやるためであって、分かりやすい例で言うと青森の場合だったら、地方銀行の生き残りをかけて、今までやらなかったような融資のやり方をDMO・DMCを通じてやるっていうやり方も一つなのです。だから、なかなか融資が出ないところを地方銀行としてもそれは盛り上がらなければならないということでやるところも増えてきています。そして、コロナ禍の場合だったら、DMCが中心になって、地域のその地域が出資している企業だけが入れるポイントカードを使って、地域内還元をしているところや、愛媛県の例だったら、そこにある町家や古民家を銀行が融資して、同時に、ニッポニア・ニッポンなどの有名なブランドに、そのホテルを運営させる形をやるところもある。それは地域ごとのやり方があると思うのですが、ここで生まれて、このまちを出ずに、このまちで生きていこうと思っている方々が夢を持てるような形で何かできていくと良いと思います。

信楽の考え方として、これはどうですか。

藤原副委員長： 甲賀市の中では信楽は観光地として認識されていますし、実際に観光客の方にも来ていただいている場所ではあるのですけれども、これをどんどん人数を増やしていけばいいのかというと、先程おっしゃったようにオーバーツーリズム問題もありますし、もちろん産業文化の広報をしていくことは大事ですけれども、信楽としてどんどん来てくださいというよりも、どちらかというところとちゃんとお金を落としてくれる人が来てくださいという、来てくださるお客さんを選ぶという部分と、あとは観光客に来て欲しいがために自分たちの文化を変えることまではするべきではない、無理して来てくださるのではなくて、今の魅力をちょっと磨けば良いというところはやるべきだとは思いますが、自分達を変えてまで人を呼ぶということはするべきではないと思います。

DMO・DMCについては、今の体制ではできないこともできるでしょうし、変えていかないといけないですけども、DMO・DMCにこだわる必要はないというふうには思っています。

委員長： 今の話もうちの学生たちの研究の対象で、伝統文化の研究があり、日本のクールジャパンという政策は海外の人に売れるためのマーケットインの発想で、要するにこういうものが売れるからこういうものを作ってくださいという言い方をすることが良くないのです。伝統工芸というプロダクトはこちらが作りたいものを作っているのだから、それを買いたいという人を世界へ向けてどう探すか、高知県や和歌山県などは海外のこの層に売るということを考えているので、海外の越境ECを非常に頑張っている県もあるのです。滋賀県がECサイトで海外のどこかの国に甲賀のこれ売るということをやるならば、積極的に載せてもらい、売りたいということを伝えることもすごく大事だと思っております。

これも甲賀の状況が分からないのですけれども、和歌山県の白浜というのはわかり易い観光の問題なのです。白浜は温泉地で観光地として有名で、観光客も増えているのですけれども、和歌山県の中で白浜町は、平均年収が一番低いのです。彼らは夏にしか儲けるつもりがないのです。夏が繁忙期で冬は閑散期だからと言って期間労働者しか雇わないのです。そうすると必然的にみんなの所得が上がらないのです。観光業が栄えて町が滅びるといえるのはこういう状態なので、まちを栄えさせるために観光とは何なのかということ、先ほど小山副委員長がおっしゃったような観光まちづくりということだろうと思います。

そのまち全体がまちの人の生活を支えるためにちゃんと産業をやっているというこの辺りを、みなさんが交通整理をうまくやってくれば私は間違えることはないと思います。ただ、その部分は市役所でやるべきではなく、誰が先導的にやっていくのか、ここのところをリードしていて、地域全体の潤いをつくっていくにはどのような形が一番いいのかということ、議論すべきところはあると思います。

今のところを含めて、意見などどうでしょう。大河原委員、一番初めに皆さんで考えたらいいということをおっしゃられたので、今話を聞いてどうでしょう。

大河原委員： 新たな組織を作ってそこに事務局があって、運営していくには労力が要するのですけれども、今のこちらが事務局を持っていただいている状況で検討会をするということであれば、本当素晴らしいメンバーがいらっしゃるのだからかなと思います。計画ができたので、ありがとうございます、終わり、ではもったいないメンバーと思ったので、あのようなことを言いました。清水委員が、観光の関係者の連絡会を作ったかどうかとおられたのを、欠席の際に代弁して言ったのですけれども、わざわざまた違うメンバーを集めなくても、今いらっしゃるメンバーでどうかということでした。

清水委員： 甲賀市には、観光ボランティアガイドさんが200人以上おられます。水口には歴史や文化を研究されているグループがあります。バスをチャーターして、さまざまな史跡のところへ見学に行かれる、しっかりしたグループがたくさんあります。それから、先ほども言いましたが、お年寄りの方を活用したら、いわゆる甲賀市版DMOが私はできるのではないかなと思います。

芳田委員： 今後のことですが、この目標指標は令和6年度になっていますよね。今の状況で、考えた数字です。極端な話、皆さんがワクチンを打って大幅に上回る可能性もありますよね。

委員長： ワクチンに関しては、おそらくそうなった状態でここぐらいだろうというところ

ろでしょう。

芳田委員： 今分かる範囲内で作った計画なので、例えば来年にも数値を見直さないといけ
ない状況になる可能性もありますよね。

委員長： ありますね。特に中国本土はいつでも旅行する準備が出来ているので、日本の
コロナが開けた瞬間にたくさん観光客が来ると思います。

芳田委員： 65歳以上の方でワクチンを2回打って、さあどこに行こうと言っている方がた
くさんいる空気も感じますし、早急に見直さないといけなくなり、また集まらな
ければならないと思います。

委員長： 例えば先ほどの「道の駅あいの土山」は市の財政だけでやるものではないです
ね。ただ、こちら側が受け入れ側として向こうが勝手にここに作ったのではなく、
ここに作って欲しいという要望をこちら側で持っていけば、やりやすいという話
なのです。こちらは理想としてこれがあると世の中こうなりますということ考
えていくと、やはり面白いことや尖ったことをやるには予算は下りますか
ら、アイデアがないところには下りてこないだけの話です。そこを上手に使う
先進地になっていけば、またいい形ができていくと思います。

日本の場合、地方誘客のテーマ別誘客という形があり、その中に忍者が入って
いましたから、忍者誘客をどれだけインバウンドでここが政策を出したかとい
ったら、おそらく伊賀が先行してしまっていて、本当の忍者は甲賀だと言い張れば
いいのですけれども、そういうこともたくさんあると思うのです。

それは住民側からこうだという気運が上がらないと、行政の方もやりにくい部
分がいっぱいあると思います。

小嶋委員長： 「スカーレット」の効果で追い風が吹いた甲賀市にとっては、令和元年はコロ
ナで全国でも非常に残念な地域ではないかと思っています。

先ほど清水委員もおっしゃっていましたが、お金をかけ過ぎても難しい部分も
あります。「スカーレットで甲賀を盛り上げる推進協議会」の活動や映画の撮影
も頑張っていたいただいており、お金が掛からないので今後も力を入れていくべきだ
と思っています。「甲賀流リアル忍者館」も1億円程度投資をしていただいて、
応援させていただいているのですけれども、今後さまざまな計画の中にも当然お
金もかかってきます。

コロナの影響もあったのですけれども、「ロイヤルオークホテル」の前を通ると
お化け屋敷のようになっており、非常にショックを受けています。「鮎家の郷」
が「めんたいパーク」に変わるという話もあります。滋賀県でも「鮎家の郷」と
言うと、滋賀県のお土産物屋では「たねや」ができるまでは一番大きかった施設
です。実際、京都はだいたい戻ってきたようではありますが、東大路通だったり四条

通だったりシャッター街のように見たことのないような光景になっていたということで、この観光っていうのは本当に一歩踏み出すのに相当勇気がいる商売だということ、最近コロナを通じてよく感じるようになりました。だからこそ、伝統・文化・歴史に根づいた観光振興を図っていかないと長続きしないのではないかと思います。教育委員会にある歴史文化財課はあれだけの人数を抱えられて、学芸員もたくさんおられて、これだけ甲賀市全体の歴史をしっかり勉強しておられる、滋賀県でもおそらく甲賀市が一番じゃないかと思っています。甲賀市の住民の方もそうですし、市政の方もしっかりと伝統・文化・歴史に非常に興味を持って進められているっていうのは甲賀市の特徴の一つだと思いますので、今後もしっかりと守りながら、地に着いた観光まちづくりで観光振興を図っていけるような話し合いが常に持てれば、コロナが起きようが何が起きようがそれほど揺らぐことはないと思いますので、右往左往して一気に流れを変えてしまうよりも、しっかりと自分たちの特徴を生かしながら磨き上げるということで徹底をしていった方が良くと思います。

委員長： 初めにありました資料6、資料7の審議につきまして、一部10文字程度増やすということはありませんでしたが、こちらを市長へ答申していくということでもよろしいか確認させていただきたいと思います。市長に答申という形でよろしいければ、挙手いただいてよろしいでしょうか。

(挙手全員)

委員長： こちらに関しては出席者全員という形で、市長にご報告させていただきたいと思います。

次第3. その他

- ・事務局より今後のスケジュール説明
- ・産業経済部長挨拶

次第4. 閉会

以上 12時終了